

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

日本人は太平洋で何を集めたか：
コレクション形成史を考える窓口の構築＜基幹研究：
日本人の太平洋収集に関する総合的アーカイブスの
構築＞

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2024-04-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 丹羽, 典生 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/0002000115

日本人は太平洋で何を集めたか

—コレクション形成史を考える窓口の構築

丹羽 典生

本プロジェクトは、「日本人の太平洋収集に関する総合的アーカイブスの構築」という大がかりなタイトルを掲げた。国立民族学博物館所蔵のオセアニア関連資料を、地理的歴史的に横断して検索するアーカイブスの構築をプロジェクトの軸と考えているがゆえの命名である。本館オセアニア関連資料の特色は、戦前の日本統治時代におけるアーカイブ資料から戦後の学術調査による標本や映像音響などのコレクションまで、長い時間幅のもとで集積された日本人によるオセアニアでの収集の歴史を反映した記録という点にある。これは世界的にもまれで貴重な情報の蓄積である。そうしたコレクション総体へのアクセスの窓口として多少なりとも役立つデータベースの構築を目指している。

横断検索の必要性を痛感

本プロジェクトを立案した切っ掛けは、これまでの資料調査の経験にある。博物館資料を扱う調査や展示の企画と実施に関わる度に、基本的な情報の入手に手間取ることがあった。たとえば特定の地域の何年代の情報が必要になったとして、それらは標本資料、文書、写真などのカテゴリーごとに管理され、個別のデータベースにまとめられている。また各コレクションには、収集者による収集や本館への寄贈の経緯が明記されておらず、それらを確認する作業が別途必要になる。

つまり特定のものがいつどこで誰によって集められ、本館

所蔵の同時代・地域に属する資料に何があるのか、簡便に知る手段がなかったのだ。そこで少なくとも本館のオセアニア関係資料だけでも、横断して資料を相互に照らし合わせながら検討できる、使い勝手のよい仕組みが欲しいと感じていたのである。

本プロジェクトでは、したがって、本館のオセアニア関連収蔵品がもつ意義を各コレクションの収集の履歴と重ね合わせて示し、検索者がオセアニア地域の大まかな歴史的背景を念頭におきながら諸資料を検索可能な総合的アーカイブスの構築を目指している。

個別のコレクションを歴史的な文脈に位置づけるために、参照資料として日本とオセアニアの関連年表を作成した。年表はデータベースの最初の頁に置き、それにコレクション資料を紐づける予定にしている。たとえば、各コレクションは、通常個人名や探検隊単位でまとめられているため、個別のコレクションという文脈を超えた国や地域との関連性が希薄となる傾向があるが、本アーカイブスを通じて、日本とオセアニアの領域的な関係を時代と地域の文脈に資料を位置づけながら検討することが可能となる。

アーカイブスの軸となるコレクション

ただし、ひとことで日本人の収集によるオセアニア関係資料といっても膨大かつ多岐にわたることは言を俟たない。そこで今回は、可能な限り広く目配りして関連資料を拾い上げることを心がける一方で、核となる特定のコレクションをいくつか選定している。本稿ではそのうち大島襄二コレクションについて紹介したい。

大島襄二コレクションとは、地理学者である大島襄二が生涯の間に世界各地で撮影した写真コレクションである。撮影期間は1967年から1991年に相当し、探検家としてならした人物でもあるため地理的にもオセアニアや東南アジアはもちろんのこと、北アメリカや北欧、東アジアのほか、彼の研究歴としては異色の感を与えるであろうアラブ首長国連邦までが含まれている。

本プロジェクトでは、大島襄二の年譜から彼の主導・参加した調査隊の一覧、そして生涯の間に残した著作一覧を作成する。そうすることで、所蔵資料である写真が大島の調査や業績とどのような有機的な関係をもっているのかが、一目でわかるデータベースを構築する目論見である。



人像 (データ番号 H0084878、ババニューギニア・プカ島、1980年寄贈)

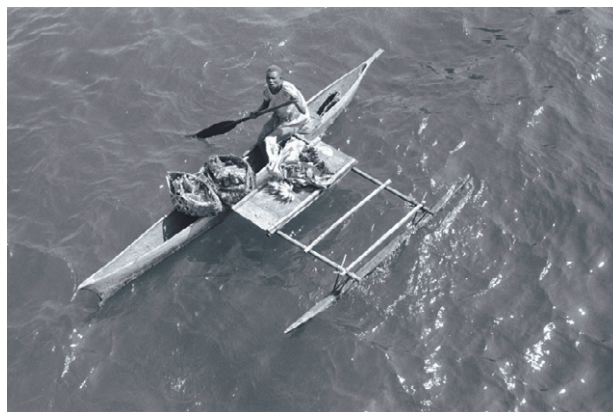
丹羽 典生（にわ のりお）

国立民族学博物館グローバル現象研究部教授。専門は、社会人類学、オセアニア地域研究。論文に「探検家朝枝利男の修業時代—1930年のアメリカ探検隊参加までを中心に」『国立民族学博物館研究報告』46(2): 349-368 (2021年)、「探検家朝枝利男の後半生—アメリカ日系人収容所での生活から博物館での活躍まで」『経済志林』88(3): 21-42 (2021年) などがある。

将来の展開

大島襄二コレクションのデータベース構築は、本プロジェクトの一部である。「日本人の太平洋収集に関する総合的アーカイブス」を通じて、本館に収蔵されているさまざまな性質の資料に関連性をもたせることで、戦前から戦後に至る本館所蔵オセアニア関連資料の窓口の構築を行うことができよう。現在の民博におけるコレクションとアーカイブは、相互に関連性が希薄で別個に独立して存在している。本プロジェクトで構築予定のアーカイブスは、それらを日本とオセアニアの関係史という視点から包括的に取り込んで、標本資料・映像音響・学術論文などの諸資料の横断的かつ有機的な利用を促進することが可能となる。

また日本とオセアニアの関係には、探検、植民地、戦争、脱植民地期以降の海外学術調査などさまざまなものがあつたが、本プロジェクトにより、それぞれの期間に行われた収集の実態について、具体的な資料を通じて検討することが容易となろう。まだはじまったばかりの段階であるので、やや結果に対して大風呂敷になっている点をご寛恕いただきたい。ただし、これまでの調査においても興味深い点がいくつか浮かび上がっている。標本資料では、たとえばパプアニューギニアのラバウルに注目することで、いくつかの調査隊による写真、標本資料、その他のアーカイブという性質の異なる諸資料を並べて有機的な調査が可能なのことがわかってきている。



港における果物売りのカヌー（データ番号 X0259655、パプアニューギニア・ラバウル、1960年、京都大学探検部の長谷川高士撮影）

本館の所蔵資料は、戦間期の民間人、軍属、軍人による収集、独立前と独立後の日本人学術調査隊による収集、さらにはオーストラリア人の収集が購入を通じて本館に届いたものまでさまざまである。これらをひとつの視点から並列して分析の視野に収められるのだ。

データベース構築でソースコミュニティとの協働を行うのは、いまでは定番になりつつあるが、本プロジェクトでも国際協力者をつうじてコレクション資料に新たな情報を付与する作業をすすめている。たとえば、オーストラリア国立大学の国際共同研究員ジュリー・ランとアニック・トマシンは、大島襄二の写真をトレス海峡に持ち帰り、現地の人びとの写真に基づく語りを記録する調査を行っている。その過程で基礎資料である写真の情報が被撮影者の視点も取り込みながら更新されるのみならず、大島襄二の調査隊が残した遺産に対するトレス海峡諸島の人びとの今の視点からの価値づけが可能となっている。こうした調査の成果を踏まえて、将来的には、オーストラリア、トレス海峡、そして日本を横断する巡回展を計画しているところである。このように、本プロジェクトを軸として、より多角的な視点から資料に光を当てるアーカイブスを構築することで、新しい情報や意義をコレクションから引き出していけるようになればと考えている。



船小屋と桟（データ番号 X0327668、パプアニューギニア・ラバウル、1974年、大島襄二撮影）